短歌

移りゆく季節

寺田光和（昭和7年卒）

バッケウドヒコヒコワラビの春の色はやもほのぼの二月の市場
二輪草は今年も連れて咲きをれど友逝きたれば一人し摘めり
庭先に固く根づきし山取りのサビタの花に紋黄蝶舞ふ
空青く山山青く湖青し青き世界に心染まりぬ
抽斗の奥より出で来亡き妻のうら若き日のセピアの写真
気に入りの手編みの下着に亡き妻の気付かぬほどのつくろひのあと
晩酌はこのぐいのみでと暮れ方に空色深き白岩焼買ふ
み年の「み」己巳（きいし）巳の文字のいづれかと短歌に教へし師をなつかしむ
かすかなる羽音残してかぎとなり帰雁は低き雲に消えゆく
足取りのたしかならざる下山路を高山蝶の舞ひていざなふ

（千秋短歌会・ならやま短歌会主宰）

俳句

子捨川（こすてがは）（陸前国白石付近の川なれど、近頃その名悪しとて改名せらるるとかや）

阿部菁女（旧姓　田口聰子　昭和33年卒）

引鴨のこゑ残りゐる子捨川
姉沼の名の優しさよはんの花
安見子（やすみこ）は十九となりぬ桃の花
ひじき煮る出羽山伏の来さうな日
梅花藻のゆるる茂みがわが住処
子燕や床屋が朝の水つかふ
弦（つる）打ちをせよ椎の花匂ふ夜は
行々子喉の小骨がまだとれぬ
空蝉の中のくらがり紅楼夢
念仏の衆が宙ゆく枇杷の村

（俳句結社小熊座同人）

部活動紹介

将棋部

本校将棋部が同好会から部に昇格したのは平成十年。倉川尚氏が夏の全国大会で個人三位になるなど、これまでの実績が認められた結果である。その後、翌十一年の夏の全国大会では、男子団体（倉川尚、進藤知巳、三浦良太）で三位。最近十年では全県大会の男子団体で平成十一年～十三年、平成十六年～十九年の計七度優勝しており、昨年夏の全国大会では男子団体（筒井拓弥、菅原陽太、會場健大）で五位入賞という成績を収めている。

全県大会でAがVBも三位

本年度の秋高将棋部は強い。5月の全県大会初日に男子団体で秋田A（筒井拓弥、菅原陽太、村上史生）が優勝、秋田B（平野祐一、杜昊、鈴木涉）が三位となった。また、団体優勝メンバー以外が参加できる二日目の個人戦では橋本貴弘が優勝した。将棋部をリードしているのは、部内の双璧、二枚看板とも言える筒井拓弥、菅原陽太の両名である。筒原コンビと称される彼らは、部内では桁違いの強さを誇り、菅原は今年度のアマの全県大会でベスト8の成績を収めている。そんな彼らの強さが他の部員たちにも火をつけたのか、今年の部員全体の頑張りには目を見張るものがある。普段はもとより、大会一か月前は学校で毎日四時間練習し、家でも積極的に定跡、詰め将棋、ネット将棋等を行い、さらには年に数回の将棋部OBとの練習会を意欲的にこなすなど、確実に実力アップしている。チーム目標は、昨年の全国五位以上の成績を収めることである。

他方、個人戦では組み合わせ等にも恵まれず、満足のいく結果を残せなかった部員も少なくなかった。しかしながら、努力が「明確な結果」の形で常に報われるとは限らない、ということを知ることも部活の重要な面であると思う。ただ「将棋」には、努力の過程で得られるものの大きさ、自分の力の限界を試す楽しみがある。努力自体を楽しく思わせるほどに、今年の将棋部は輝いている。全国出場メンバーは将棋という「真剣勝負」を楽しめるだけの「努力と実績」を持っている。最後になりますが、今後も同窓会諸氏の力強いご支援・ご協力を期待いたしております。

（部長・平野祐一）